様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　元 年　 ６ 月 ２０ 日現在

機関番号：３３９２９
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2016～2018
課題番号：１６Ｋ０２５１５

研究課題名（和文）十九世紀アメリカにおける知のコミュニティの形成

研究課題名（英文）The Formation of Intellectual Communities in 19th-Century America

研究代表者
倉橋　洋子（Kurahashi, Yoko）

東海学園大学・経営学部・教授

研究者番号：１００８２３７２

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,400,000円

研究成果の概要（和文）：独立後、民主的な国家をめざした18・19世紀のアメリカは、ヨーロッパからの学術的独立も志向し、知的コミュニティを形成した。本研究では様々な知的コミュニティの形成過程・活動・アメリカの知的独立やアイデンティティ形成への影響を考察した。テーマは、１．サタデー・クラブの形成とホーソーンの奴隷制に対する動向、２．女性たちの視点からみたブルック・ファームの理想と現実、３．ボストン博物学協会の役割とソローの作品への影響、４．アメリカ哲学協会とアメリカン・アイデンティ ティの誕生、５．翻訳コミュニティにおけるフラーの翻訳や翻訳倫理、６．ヤング・アメリカにおけるメルヴィルとダイキンクの関係、である。

研究成果の学術的意義や社会的意義
アメリカが民主国家として成立し、学術的にもヨーロッパからの独立を果たすには、独立後の18・19世紀における知的コミュニティの形成は必然的であった。本研究成果の社会的意義は、当時の知識人が国内外の情勢にいかに敏感に反応し、知的コミュニティを形成したかを把握し、その上でそれらの活動が社会に与えた影響を文学・文化・社会科学的に考察した点にある。また、学術的意義は、本研究が今日に繋がる知的コミュニティに関する研究の基になるものであり、研究の発展の可能性が大きい点にある。

研究成果の概要（英文）：Aiming to become a democratic nation after independence, 18th and 19th century America also strived for academic independence from Europe, forming intellectual communities. In this study, we considered the formation process and activities of various intellectual communities, American intellectual independence, and the effect of the formation of American identity on them.
The themes are as follows: 1. The formation of the Saturday Club and Hawthorne's tendency towards slavery, 2. The ideal and reality of Brook Farm from the point of view of women, 3. The role of Boston Natural History Society and its effect on Thoreau's works, 4. The American Philosophical Society and the birth of American identity, 5. Margaret Fuller's translation and the translation ethics, 6. The relationship between Melville and Duyckinck in Young America.

研究分野：アメリカ文学

キーワード：奴隷制　サタデー・クラブ　アメリカ哲学協会　ヤング・アメリカ　ボストン博物学協会　翻訳　ブルック・ファーム　エコロジカル・ユートピア

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９、ＣＫ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

18・19 世紀アメリカ文学・文化に関するこれまでの研究過程において、アメリカのヨーロッパからの知的独立やアイデンティティの確立に、知のコミュニティの存在は無視できないとの認識をもった。そこで、まず個別の知のコミュニティの形成の過程、目的、活動を研究し、次に知のコミュニティ間の重層的な関係をも研究することに至った。その上で、アメリカン・ルネサンス期の作家やそれ以前の思想家と知のコミュニティとの関わりを調べ、彼らのアメリカの知的独立やアイデンティティの確立等への貢献を研究し、知のコミュニティの研究を発展させることを計画した。

２．研究の目的

独立戦争を経て民主的な国家建設をめざす 18・19 世紀のアメリカでは、ヨーロッパからの学術独立も志向され、国内のみならずトランスナショナルな動きも活発化した。かかる状況下において文学、哲学、科学、博物学、出版等に関する各分野の知識人は、アメリカ文学の確立、奴隷制廃止、ユートピア運動、翻訳活動等に関心を示し、アメリカ哲学協会、サタデー・クラブ、ヤング・アメリカ、および博物学、翻訳、ユートピア運動等を中心とした知のコミュニティを形成した。本研究は知のコミュニティの形成の過程と活動や、コミュニティ間の重層的な関係を明らかにした上で、フランクリン、エマソン、ホーソーン、メルヴィル、フラー等のコミュニティにおける活動がアメリカの知的独立やアイデンティティの確立にいかに貢献したかを明らかにすることを目的とした。

３．研究の方法

19 世紀を中心とした知のコミュニティ（アメリカ哲学協会、サタデー・クラブ、ヤング・アメリカ、および博物学、翻訳、ユートピア運動）の形成、目的、活動について研究した。そのために国内外の文献を収集した。国内で入手できない文献に関しては、アメリカの図書館を訪問して入手した。入手した文献を解読し、ジェファーソン、ホーソーン、エマソン、メルヴィル、フラー、ピーボディ等と知のコミュニティとの関係や活動、およびコミュニティ間の関係を調べ、彼らがアメリカの学術的独立やアイデンティティ確立にいかに貢献したかを明らかにした。その後、研究結果を国内外の学会にて口頭発表した後に、研究成果を論文や書物にしてまとめ、発表した。この間、研究代表者と分担者は定期的に会合を持ち、研究の中間報告会を開催し、研鑽した。

４．研究成果

研究成果として最終年度には、研究代表者・分担者全員が執筆し、『繋がりの詩学―近代アメリカの知的独立と＜知のコミュニティ＞の形成』彩流社, 2019 を出版した。個別の研究成果概要は以下の通りである。

倉橋洋子は、2016 年度には「“Ethan Brand”にみる円環構造の意味について」を日本ナサニエル・ホーソーン協会第 35 回全国大会、『“ The Gentle Boy ” にみるコミュニティにおける共生への可能性」を日本アメリカ文学会中部支部例会にて発表した。また、「ホーソーンのアメリカ独立革命観」『人と言葉と表現』（学術図書出版）2016（共著）を執筆した。2017 年度にはホーソーンとソローの作品にみる円環とコミュニティとの関連を 2017 Thoreau Society Bicentennial and Annual Gathering（国際学会）にて発表し、「19 世紀アメリカにおけるカンバセ―ションによる教育と自己啓発」を国内の学会誌に発表した。2018 年度にはホーソーンとメルヴィルの作品にみる円環とコミュニティとの関連について International Poe & Hawthorne Conference （国際学会）や SWPACA2019（国際学会）にて口頭発表した。また

“The Circular Images and Community in “Ethan Brand” and *A Week on the Concord and Merrimac Rivers*” を国内の学会誌に発表した。『繋がりの詩学』ではサタデー・クラブを中心に南北戦争に関して政治と文学、個人と集団等について執筆した。

城戸光世は、2016 年度にはアメリカ文学史という視座から 19 世紀アメリカ古典文学を地域や時代を超えた繋がりの観点から研究し、日本アメリカ文学会年次大会シンポジウムにて発表した。2017 年度には 19 世紀後半の作家 Sarah Orne Jewett の考えるエコロジカルなユートピア的地方共同体を考察し、英文学会九州支部年次大会シンポジウムで「ポストロマン主義時代のエコロジカル・ユートピア」として、また主宰した国際ワークショップ「Transcendent Women in the Long Nineteenth Century」で"Travelers in Ecological Communities: Reading Sarah Orne Jewett in the Age of Ethical Turn"を発表した。2018 年度には International Poe & Hawthorne Conference（国際学会）にて発表し、ユートピア共同体ブルック・ファームの女性の視点からの記録に焦点を絞った論文を『繋がりの詩学』にて執筆し、イギリス・ロマン派学会シンポジウムにてフラーの旅行記に関する発表をした（招待発表）。

竹野富美子は、2016 年度にはホーソーンの作品にみる共同体を日本ナサニエル・ホーソーン協会第 35 回全国大会にて、「ソローと博物学協会」を日本アメリカ文学会中部支部例会にて発表した。2017 年度にはソローとボストン博物協会との繋がりを 2017 Thoreau Society Bicentennial and Annual Gathering （国際学会）にて発表し、“ ‘Silence Was Audible’: Views on Music in the Works of Dwight, Thoreau and *The Blithedale Romance*.” Thoreau in the 21th Century: Perspective from Japan （金星堂）2017（共著）を執筆した。2018 年度には ‘ “Ethan Brand” and Its Community’を International Poe & Hawthorne Conference（国際学会）にて、また ‘ Global Imagination of Edgar Allan Poe: “ The Golden-Bug ” and Natural History in South Carolina’を NMLA（国際学会）にて発表した。またソローの作品に見られるボストン博物協会の繋がりと、作品への影響について考察し、『繋がりの詩学』にて執筆した。

竹腰佳誉子は、ベンジャミン・フランクリン設立のアメリカ哲学協会やフィラデルフィア図書館会社といった「知のコミュニティ」について、反知性主義や博物学の観点からそのネットワークや組織の役割を研究し、独立革命期のアメリカで活躍した知識人たちの関係性やそれらの組織のアメリカ独立への影響、アメリカニズムの誕生への貢献等を明らかにし、論文等にまとめて発表した。2016 年度には 「Benjamin Franklin と知のコミュニティ―フィラデルフィア図書館会社」を日本英文学会中部支部第 68 回大会にて発表した。2017 年度には、2016 年度に発表したものを発展させて『中部英文学』37 号に発表した。2018 年度には、『繋がりの詩学』にて「アメリカ哲学協会とアメリカン・アイデンティティの誕生」を執筆した。

古屋耕平は、マーガレット・フラーの翻訳実践及び理論と 19 世紀前半の知のコミュニティ形成との関係について、またフラーと同時代のアメリカ文学作品や一次資料についての研究も進めた。2016 年度には“Classic American Literature”を *Journal of British & American Literary Studies* 37 号に発表した。2017 年度には、メルヴィルのゲーテとの対話について The 2017 International Melville Society Conference（国際学会）にて、フラーの翻訳について国内の大学主催シンポジウムにて、またフラーのエッカーマン『ゲーテとの対話』翻訳について国内の学会研究会にて発表した。さらに、「アメリカン・ルネサンスと幸福の追求」、および「アメリカン・ルネッサンスと翻訳」等の招待講演を国内の大学にて行った。2018 年度には、ドイツの翻訳理論等について Transcendentalist Intersections（国際学会）にて、さらに“The Photo Negatives of the Nation: Italy, War, and Hawthorne’s Writings after 1860” を International Poe and Hawthorne Conference（国際学会）にて発表した。また、ホーソーンの“Chiefly about

War Matters”と戦争ツーリズムについて『言語文化』36 号に、“Melville, Babel, and the Ethics of Translation.” を *ESQ* 64. 4、に発表した。『繋がりの詩学』にてフラーの翻訳テクストと原文のドイツ語テクストを直接比較する比較文学的手法のテクスト分析について執筆した。

林　姿穂は、ハーマン・メルヴィルと出版社との関係について研究を行った。メルヴィルは出版社が商業主義に抗することができず、またヤング・アメリカ運動も本来のアメリカらしいキャノンを追求することができず、アメリカ人作家の地位向上には繋がらなかったという見解を得た。2018 年には、「『ブライズデイル・ロマンス』に描かれる病と魔女のイメージについて」日本ナサニエル・ホーソーン協会中部支部例会にて発表した。また、『繋がりの詩学』にて『メルヴィルと「ヤング・アメリカ」』を執筆した。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計 10　件）

倉橋洋子:１.「19 世紀アメリカにおけるカンバセ―ションによる教育と自己啓発―知のコミュニティ形成に関連して」『共生文化研究所紀要』3 号（2018）、２. “The Circular Images and Community in “Ethan Brand” and *A Week on the Concord and Merrimac Rivers*” 『共生文化研究所紀要』4 号（2019）

城戸光世:１.「ホーソーン家の旧牧師館テクストにみる自然現象」『エコクリティシズム・レビュー』9 号（2016）、２.「日本における<アメリカン・ルネサンス>」『中国・四国アメリカ文学』52 号（2016）、３.「Margaret Fuller の旅行記における詩人／科学者としての natural historian」『イギリス・ロマン派研究』43 号(2019)

竹腰佳誉子:「ベンジャミン・フランクリンと知のコミュニティーフィラデルフィア図書館会社を中心に」『中部英文学』第 37 号（2018）

古屋耕平：１.「合衆国の陰画――ナサニエル・ホーソーンの“Chiefly about War Matters”と戦争ツーリズム」『言語文化』36 号（2019）、２. “Melville, Babel, and the Ethics of Translation.” ESQ: A Journal of Nineteenth-Century American Literature and Culture 64. 4 (2018)、３. “Translation and Classic American Literature: A Prospect for the Future of American Literary Scholarship” Journal of British & American Studies 37 (2016)

〔学会発表〕（計 32　件）

倉橋洋子：１.「“The Gentle Boy”にみるコミュニティにおける共生の可能性」日本アメリカ文学会中部支部 11 月例会、２. “The Circular Images and Community in “Ethan Brand” and *A Week on the Concord and Merrimac Rivers*.” 2017 Thoreau Society Bicentennial and Annual Gathering. 2017、３. “The Circular Images in *The Scarlet Letter* Compared with those in “Ethan Brand” and *Moby Dick*.” Southwest Popular /American Association Conference. 2019.

城戸光世:１.「ポストロマン主義時代のエコロジカル・ユートピア ―Sarah Orne Jewett 作品における自然と人の共生コミュニティ」日本英文学会九州支部第 70 回年次大会シンポジウム. 2017、２. “Reading The Scarlet Letter in the 21st Century.” International Poe & Hawthorne Conference. 2018、３.「Margaret Fuller の旅行記における詩人／科学者としての natural historians」イギリス・ロマン派学会第 44 回大会. 2018.

竹野富美子：１. “Thoreau and the Boston Society of Natural History in ‘Natural History of Massachusetts.’” Thoreau Society Bicentennial and Annual Gathering 2017 .2017、２.

"'Ethan Brand' and Its Community" Poe and Hawthorne International Conference. 2018、３．竹野富美子 "The Global Imagination of Edgar Allan Poe: 'The Gold-Bug' and Natural History in South Carolina" Northeast Modern Language Association 50th Annual Convention. 2019.

竹腰佳誉子:「Benjamin Franklin と知のコミュニティ――フィラデルフィア図書館会社を中心に」日本英文学会中部支部第 68 回大会. 2016.

古屋耕平:１. "Fuller's Translation of Eckermann's Conversations with Goethe: German Translation Theories and the Conception of Feminist World Literature." Transcendentalist Intersections: Literature, Philosophy, Religion. 2018、２. "The Photo Negatives of the Nation: Italy, War, and Hawthorne's Writings after 1860." International Poe and Hawthorne Conference. 2018、３. "Melville's Conversations with Goethe: Representation, Translation, and Nation in Moby-Dick." The 2017 International Melville Society Conference. 2017.

〔図書〕（計　10　件）

倉橋洋子：１.「ホーソーンのアメリカ独立革命観」『人と言葉と表現—英米文学を読み解く—』学術図書出版, 2018.（共著）２.「ホーソーンと『懐かしの故国』のピアスへの献辞—サタデー・クラブを中心に」『繋がりの詩学—近代アメリカの知的独立と＜知のコミュニティ＞の形成』彩流社, 2019.（共著）

城戸光世：１.「アダプテーションとしての A—『緋文字』受容の変遷」『ホーソーンの文学的遺産—ロマンスと歴史的変貌』開文社, 2016.（共著）２.「十九世紀アメリカ電磁気文化とマーガレット・フラーのフェミニズム戦略」『身体と情動――アフェクトで読むアメリカン・ルネサンス，電気と磁気の身体論』開文社, 2016.（共著）３.「女たちのユートピア—ブルック・ファームにおける理想と現実」『繋がりの詩学』彩流社, 2019.（共著）

竹野富美子：１. "'Silence Was Audible': Views on Music in the Works of Dwight, Thoreau and *The Blithedale Romance*." *Thoreau in the 21th Century: Perspective from Japan*. 金星堂, 2017.（共著）2. 「『マサチューセッツの報告書』とソローの「マサチューセッツの博物誌」」『繋がりの詩学』彩流社, 2019.（共著）

竹腰佳誉子:「アメリカ哲学協会とアメリカン・アイデンティティの誕生—金星とマンモスを追いかけて」『繋がりの詩学』彩流社, 2019.（共著）

古屋耕平:「想像の世界文学共同体――マーガレット・フラーの『ゲーテとの対話』翻訳」『繋がりの詩学』彩流社, 2019.（共著）

林　姿穂: 『メルヴィルと「ヤング・アメリカ」』『繋がりの詩学』彩流社, 2019.（共著）

メリカ電磁気文化とマーガレット・フラーのフェミニズム戦略, 彩流社, 2016 年, 4, 単行本（学術書）, 共著, 竹内勝徳・高橋勤（編著）,

〔産業財産権〕

○出願状況（計　0　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年：
国内外の別：

○取得状況（計　0　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織

(1)研究分担者
研究分担者氏名：城戸光世

ローマ字氏名：Kido Mitsuyo

所属研究機関名：広島大学

部局名：総合科学研究科

職名：准教授
研究者番号（8 桁）：10351991
研究分担者氏名：竹野富美子

ローマ字氏名：Takeno Fumiko

所属研究機関名：東海学園大学

部局名：教育学部

職名：准教授
研究者番号（8 桁）：20751746
研究分担者氏名：竹腰佳誉子

ローマ字氏名：Takegoshi Kayoko

所属研究機関名：富山大学

部局名：人間発達科学部

職名：准教授
研究者番号（8 桁）：70377232
研究分担者氏名：古屋耕平

ローマ字氏名：Furuya Kohei

所属研究機関名：神奈川大学

部局名：外国語学部

職名：准教授
研究者番号（8 桁）：70614882
研究分担者氏名：林　姿穂

ローマ字氏名：Hayashi Shiho

所属研究機関名：三重県立看護大学

部局名：看護学部

職名：准教授
研究者番号（8 桁）：80649830

(2)研究協力者
研究協力者氏名：
ローマ字氏名：
※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。